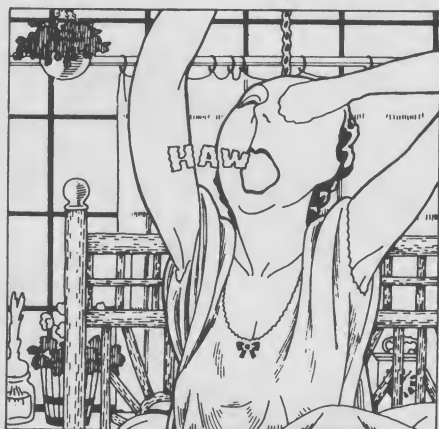
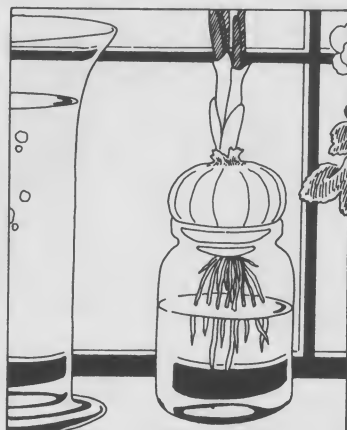
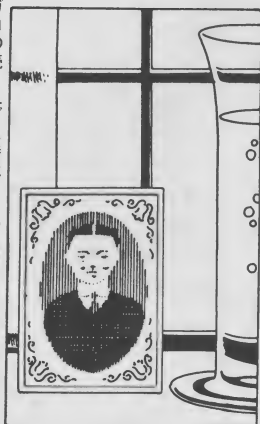
愛妻記

ひさうちみちお

昭和26年、京都に生まれる。啓光学園高校卒。デビュー作「パースペクティブキッド」'76・8月号)。主著「山本さん家の場合に於けるアソコの不幸に就て」「100万人のマスチゲン」等。

考えて見れば人間が人間でないものになるというのは、そんなに珍しい事ではない
毒虫とか虎とかハエとか、またはなったと言うのでなく始めからしまいまでツボの中の想念のかたまりというむずかしい話もある

ただぼくの場合自分が何になったのか
正確には解らない　ぼくのしている事を
知りぼくの姿を見れば多くの人は迷いも
ためらいもせず答えるだろうけど……

あ、いやいや玉ネギなんかじゃない
玉ネギなんか……誰がそんなもんに…
女は(実はかつてぼくの妻だった人なんです)
玉ネギの横の大きなビンの中に居る
ぼくに挨拶したんだ　ブクブクとアワが
たって生命の気配がするでしょうがビンに

あれ?そうか妻だった、と言うのは
違うなあ　離婚した覚えはないし
今も一つ屋根の下に暮してるからリッパ
に夫婦なんだ

左はぼくの写真　妻は亭主の
写真を部屋に飾るというような事
は絶対にしない女だけれどぼくが人間
でなくなってから面白がってぼくの写真
をぼくのビンの横に置いた

妻と知り合ったのはぼくが19の時、
一ケ月ほどで妻はぼくを捨て他の男の
ところへ行き、一年後ぼくのところへ
もどり二ケ月後また他の男の所へ行き
三年後ぼくのところへもどり突然
結婚しようと言った

ぼくは常に気が狂うほど妻を愛して
いたので結婚した

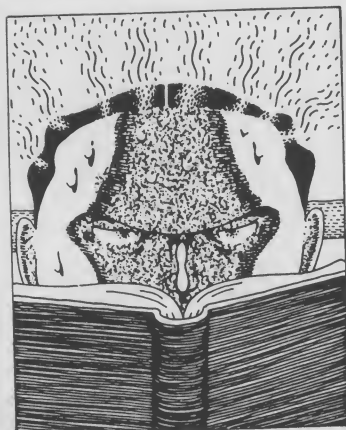
妻は外に出て仕事するのが好きな
職業婦人でぼくは仕事嫌いの低血圧
でそれなりにつりあいはとれていた

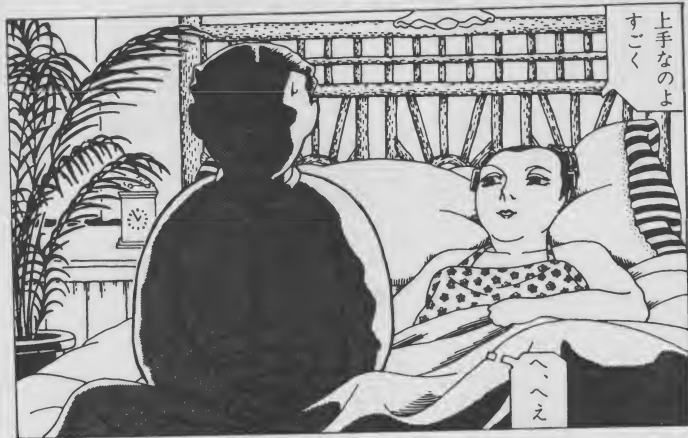
ガロの売り上げは時代によって違いがあるようですが私はいつの時代でもガロが面白くないと感じた事は一度もない。これはベンチャラではない。こおゆう雑誌を
マイナーにしておく日本の若者を私は憎悪したいと思う。それ以外のガロをささえてる若者は偉い。

今でこそ妻は平気で男を家へ連れ込むが当時は仕事が終って帰りがけのダチンにホテルへしけこむ程度だった

ほくは結婚前に二度も煮湯を飲まされていたから浮気ぐらいには平気でいられると思っていたのだが

そうもいかなくて……

タダイマー

しかしぼくは妻の前では飽くまで静かな男でいたかったのでとり乱してうるさく言ったりしなかった

すると妻はぼくが気が狂うほど妻を愛するのはやめて普通に常識的に愛するようになったと安心していけしゃあしゃあと相手の男の事などをぼくに話して聞かせるようになった

無論ぼくも出来る事なら妻の不貞
に怒るというような、かたよった了見
は捨て心の結びつきを大切にしようと思ったが

そう思う端から妻が他の男とベチョ
ベチョにヨロコビ狂っている図が頭に
浮び理性をけとばして居座った

我慢にも限度というものがあった
限度というものが　だから

ぼくは実力行使に出た

ぼくは妻の浮気に抗議を表明し
断食する事にした

というのが妻の反応だった　それで良い
なまじ神妙に出られてはファイトがにぶる
知人の体験談によるとやりはじめが一番
つらいという事でもあるし…

抗議の手段に断食を選んだのは特に
志があった訳でもない　恋の悩み(恋なの
だ)に食欲不振はツキモノでそれならと思い

それに悩みを持った人間は誰かに聞いて
もらいたくなるが吹聴してまわる事も
出来ず、「どうしたの、何かあったの?」と
問われるのを待っているのだがハツラツとした
健康体では、すこぶる具合が悪い
それでなくともこのテの悩みはバカにされや
すいのだから

しかしたとえ断食と言えども日常化への埋没は免れないらしく四、五日もすれば我知らず、ふと妻の食べ残しのビスケットに手がのびる事もあった

ぼくは失われた怒りを取り戻す為に自ら進んで妻の浮気を思い描いた

たちまち怒りは戻って来た、興奮を連れて

それは少し感動的だった　手も足も頭さえも弱りつつある時に一人このかただけが士気を鼓舞するかの如くリュウとそそり立ったのである

無論気負いたつ兵士をオタメゴカシに
なだめるような薄情なまねはしかねた

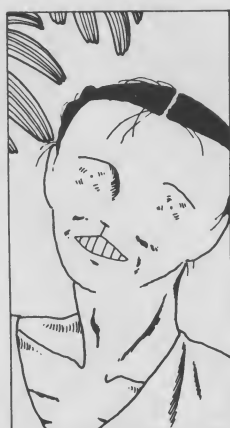
久しぶりだった　フラフラでやったせいか
大変良くて

あ
あ

それ以後ぼくの断食生活に一つのサイ
クルのようなものが生まれた

怒りを忘れないために思い描き

興奮して妻のベッドへ這い

満足に溺れないために怒りを求めた

体はどんどん弱っていき、それに反比例して情交は刺激的になりサイクルは速度を増していった

これには、さすがの妻も気味悪かったらしくぼくに断食をやめさせようと真面目に考えはじめた

断食なんてそんなんでするんじゃないのよ

もっとむずかしいモンダイでさんん……

ゴージンジェムとか…

いろいろ考えたらしいが結局解らず(何故か浮気をやめれば、とは考えなかったようで)思いあまってテレビの人生相談に出演する事にした

ええ大変問題が複雑になってきましたので法律の立場からアドバイスをいただきたいと思います

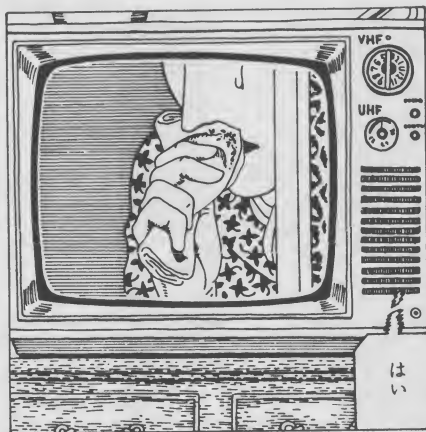
先生どうでしょう御相談者から御主人に対して離婚請求とかイシャ料は…
そうおですねえ大変むずかしいケースですからねえま、一般に離婚イシャ料が請求出来るのは暴力行為とかあ精神的屈辱など

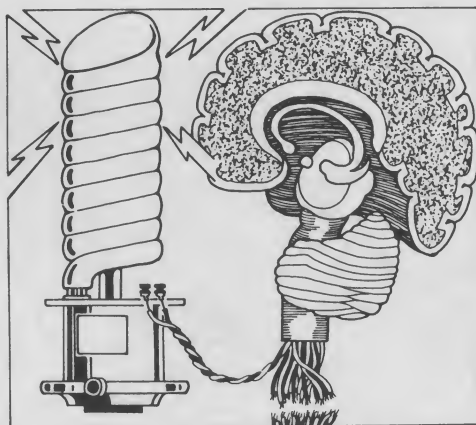
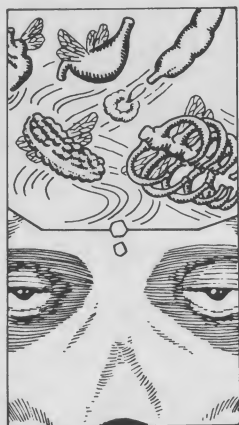
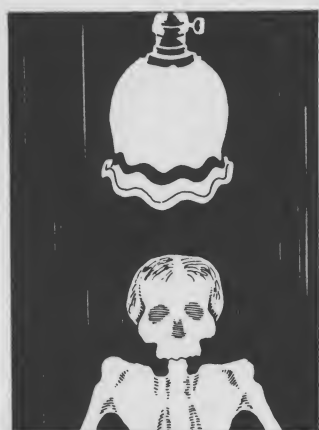
暴力行為と言いますと具体的には?
そうおですねえま、一般的に鼻の穴にキューリをつっこむとかあ……

ハアだめですかキューリは
知らなかったと答えた人 71%
知っていたと答えた人 25%
答えたくないと答えた人
イボイボがねえ……

他にはあ…?
ええおろし金を内股にはさんで歩行を強要するのも離婚理由の対象になります

あっおろし金もいけませんか
知らなかったと答えた人 62%
知っていたと答えた人 31%
イボイボが………

おそらく妻はテレビに出たりすれば
ぼくがびっくりして改心するだろうと
思ったに違いない

結局ぼくの意志は変らず妻の方が
ガイコツみたいなぼくに慣れてしまった

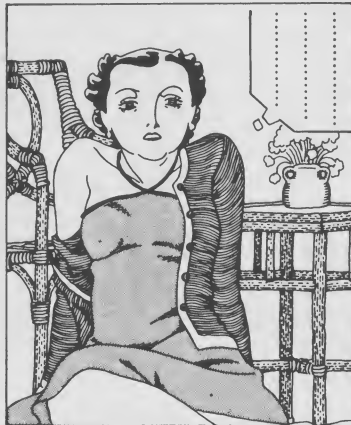
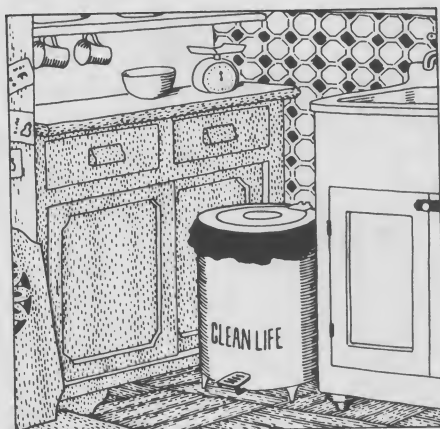
ところでぼくの方は肉がほとんどなくな
ると今度は骨や内臓が小さくなって
いった

今やぼくの生活は妻の浮気を想像する
のと妻とおこなう事だけだからそれ以外
の要らないものはどんどん消えて良い
いや消えなければならないのだ　運命だ

という訳でこんなみじめな姿になり
一度は慣れた妻も加速度のついたぼく
の変化について行けずとうとう家に帰
らなくなった

それでぼくは妻とおこなえなくなって
しまったのだがぼくの体の変化はすでに
明確な方向性を持って自立しており
その事で加速度がマイナスになる事は
なかった

もう、なんぴとも止められなかったのだ

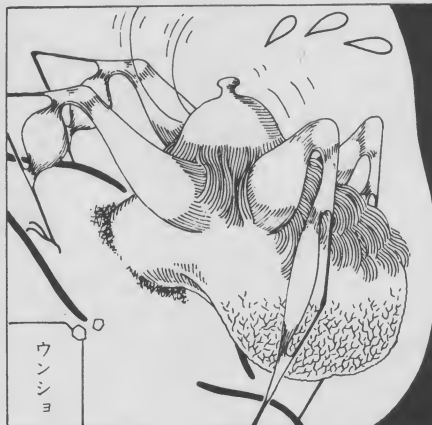
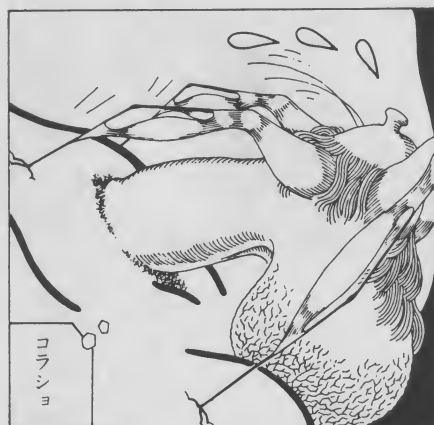
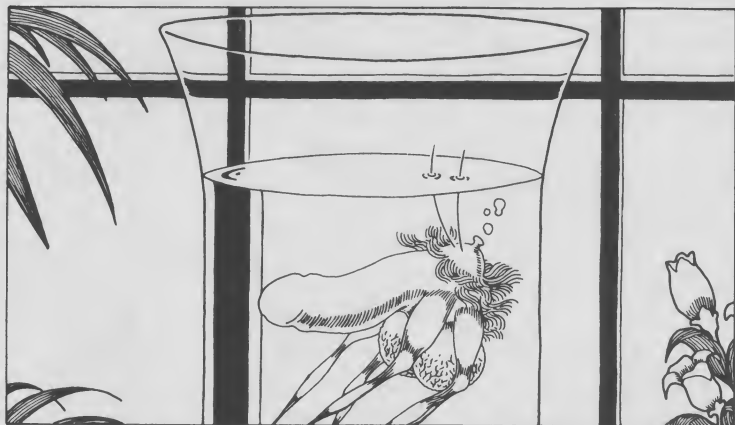
かくして一週間後、ぼくがタチの悪い
冗談にも飽きたろうと楽観して家に
帰った妻は、そこにほぼ完全な形に
進化したぼくの晴れ姿を発見した

始めに御紹介しなかったのは別に出しおしみしたワケではなく「なんや新手のコケシになったゆうんかいな」と一笑にふされる事が必至に思われたからである

自分で言っては手前みそになるがなかなか均整のとれた良い形だ

いや、たとえヒワイなコケシと言えども一日にして成らず、という事を良く物語っているではないか、と思うのだが、それにしても妻の第一印象とはかなり開きがあった事も否めない

屑入れの前で妻はためらい結局しばらくの間ぼくを飼う事にした

ウンショ

コラショ

それでも昼日中に部屋をうろつきまわら
れるのは、あまり気持ちの良いものでもない
らしくてぼくをビンの中に住まわせた

そうして金魚みたいに泳がせておいて夫婦
の情愛に目覚めた時だけとり出しては
入れたり、含んだり派手にこき使うのだ

誰かが言った事かも知れないが男のからだと
いうのはやっぱり女の持ちものなのだ
過ぎ去った思想の結果なのだから女にくれて
やって女の腹の中で暮せば良いのだ
そうとも、全ての女達が言うように

1978.3.31